

京浜協同劇団の呼びかけに応えて―

「シクラメンの花」 ―一幕―

作／栗木英章

出演

咲子（ワールド自動車）二次下請け会社の労働者
課長 その会社の労務課長
係長 同、年配の係長

（とき） 冬、昼間

（ところ） 会社の小会議室

（土地は一応愛知慎を設定しているが、上演場所や意図に応じて対応可）

―昼休み前の、会社小会議室
テーブルといすなど、その上に一台ノパソコンと黒色の従業員台帳
壁面には、「ワールド自動車と共に前進、共に反映」等々のポスターが掲示
ドアと反対側の窓際に、鉢植えのシクラメンの花
煙草の煙が立ち込めている
買塗油が座って電話中で、それを所在なげに見守っている年配の係長

課長 あゝ、委員長、どうもどうも、トコロで例の派遣法は通りますかね、・・・はあ、労政審の審議具合も気になるところで・・・
「生涯派遣」「正社員ゼロ」を目指す我が社にとって死活問題・・・いやいや労組も運命共同体で・・・今夜、例のところではとつと懇親会でもやりますか。・・・色々情報交換したいこともありまして・・・いえいえ現場に一人はねあがりの女子工員がおりましてその処理を―では今夜よろしく。
（切つてパソコンに向かう）

係長 あ の 、 タ バ コ ー
課長 (済 ま し て) 全 く 、 イ ラ イ ラ さ せ る 状 況 が 吸
係長 わ せ る わ せ る ん だ 。 で っ ー
課長 で 、 と 聞 い て る ん だ よ
係長 は あ 、 隅 か ら 隅 ま で 調 べ た ん で す が 内 も 出 な
く て ー
課長 彼 女 た ち だ っ て バ カ じ や な い ん だ よ 、 い や い
や 、 な ま じ 思 想 に か ぶ れ る 連 中 は 頭 が よ く て 一 筋
だ か ら 困 る 。 一 見 し て わ か る よ う な ま ず い モ ノ を
置 い て お く 訳 な い だ ろ う
係長 ・ ・ ・ は あ
課長 洋 服 ダ ン ス の 中 も く ま な く チ ェ ッ ク し た の か
係長 い え 、 そ の そ こ ま で は 。
課長 そ う い う 中 途 半 端 な こ と だ か ら 、
現 場 を 取 り 損 な う ん だ 。 秘 密 保 護 法 の 前 に プ ラ イ
バ シ ー な ん か な い ん だ か ら 、 と も か く 彼 女 は 、 ワ
ー ル ド 自 動 車 の 過 労 死 抗 議 集 会 や 健 康
を 守 る セ ン タ ー と か に 顔 を 出 し て る 。
係長 そ れ は 確 か な こ と で ？
課長 君 ね え 、 今 や 監 視 カ メ ラ は 五 百 万 台 以 上 設 置
さ れ て る ん だ よ 、 世 界 の ワ ー ル ド 自 動 車 ま わ り
や 、 危 険 な ア ジ ト な ん か に 特 に 集 中 し て ね 、 だ か
ら 当 然 キ ャ ッ チ さ れ る 。
係長 ・ ・ ・ 五 百 万 ・ ・ ・
課長 当 社 は ワ ー ル ド の お か げ で 成 り 立 っ て い る 二
次 下 請 け だ よ 。 そ の 従 業 員 が ワ ー ル ド に 盾 つ く
よ う な こ と を し た ら 、 私 た ち の 首 が 飛 ぶ 、 事 の 重
大 さ を わ か っ て い る の か ね
係長 わ か っ て る つ も り で す が ・ ・ ・
課長 な ら ば 、 も つ と テ キ パ キ や り た ま え 。 本 人 を
追 及 し て 、 ボ ロ を 出 し た ら 否 出 さ せ て 解 雇 す る 。
労 組 も 即 了 解 だ 。 で 、 彼 女 も う 呼 び 出 し た の か
係長 え え 、 も う す ぐ ー (腕 時 計 を 見 よ う と し た と
き ケ ー タ イ が コ ー ル す る) 失 礼 、 も し も し ・ ・ ・
(小 声 で) 会 社 へ 電 話 す る な と 言 っ て る だ ろ
う ・ ・ ・ ナ ニ 、 学 校 か ら 呼 び 出 し ・ ・ ・ だ め だ 、
お 前 出 か け て 、 先 生 に 話 し て く れ 。 若 い か ら 調 子
に 乗 っ て ハ メ を は ず し た よ う で す が 、 以 後 気 を つ
け ま す っ て 、 い い ね 。

課長 けますって、いいね。(切る) どうも――

課長 娘さん、学校どこだっけな

課長 はは・・・美南学園で。

課長 ほう、昨日栄で 派手な反原発パレードをや

係長 ったところか

係長 いえ、あれは学園祭の余興とかで――

課長 まあいい、自分の娘を抑えられんようじゃ労

務の仕事はつとまんよ。とにかく今日は彼女の

背後や交友関係をしゃべらせるんだ、いいね。

係長 やってみます

課長 念のために言っておくが、君にとって万年係

長で定年を迎えるか、課長として花道を飾るか

正念場なんだから、頼んだよ。

係長 はあ

課長 別件の打ち合わせが終わったら顔を出すか

ら。(去る)

――間――

係長は深い溜息をついた後、シクラメンの花
をなぶり、ついに花ビラを散切りつつ、独り
言をつぶやく

係長 ・・・いつも貧乏くじだ・・・あたりをつけ
るまでやらされて、最後の成果はさらってしま
うんだから・・・(ドアのノックに気が付かない)や
っぱり東京の大学出にはかなわんさ。(咲子が静か
に入ってくる)おまけにプライベートなことまで
口出しされちゃたまらんよ。

咲子 お花は大切に

係長 えっ!?(びっくりして)やあ

咲子 それとも、好き嫌い好き嫌いですか

係長 何だそれは

咲子 チェホフの『かもめ』というお芝居。トレ
プレフが母親の愛を占うんです。

係長 チェホフ――

咲子 ロシアの劇作家です

係長 ロシア・・・ソ連・・・

咲子 えっ?

係長 いやいや、ご苦労さん、まあかけて

咲子 はい(椅子に座る)

係長 仕事は辛いからね
 咲子 もう慣れましたから
 係長 入社してから――
 咲子 八か月です
 係長 はやいもんだねえ（パソコンを操作するが
 スムーズにいかず）まだ実家（いえ）の夢をみる
 のかな。
 咲子 時々は――
 係長 おふくろさん 恋しいだろう
 咲子 いまさんから母――
 係長 いない？（パソコンから離れて、台帳をめ
 くる）
 咲子 五年前に病気で亡くなりました
 係長 そうか・・大変だったねえ
 咲子 あの、どんな用件でしょうか
 係長 ふむ・・実はその用件なんだが・・（咲子
 の真つすぐな視線に合つて）君は、随分と真つす
 ぐに見るんだね
 咲子 あっ、癖なんです、ごめんなさい
 係長 いやいや、実は入社して一年以内に労務担当
 として一人ひとりと面接することになっている
 咲子 まあ――
 係長 でも、元気だから、私、大丈夫です。
 咲子 元気すぎるのも困りものでね
 係長 元気すぎると困るんですか？
 咲子 君、そう揚げ足を取るもんじゃない
 咲子 ・・はい
 係長 もう十分わかっていと思うが、我が社はワ
 ールド自動車の下請けでね。全社あげて「共に前
 進、共に繁栄」を一大目標としておる
 咲子 ・・はい
 係長 そのために、皆の心は一つでなくちゃいけな
 い、そう思うだろ
 咲子 それは・・コンベア作業でも隣りの人とか
 み合わないと大変ですから
 係長 分かるにだ、よりによって親会社に弓を引く
 ようなことを、例え一人であつても行なうなら
 我が社の秩序というか根本が崩れてしまう
 咲子 親会社に弓を引く――

係長 ワー・ル・ドの過労死抗議行動に参加したんだろ
 係長 ・・・正直に言いなさい
 咲子 ・・・来てから手紙やメールのやりとりをしていまし
 た。その頃から、残業が百時間を声、しかもほと
 んどがサ―ビス残業で、そんな酷い条件で一人、
 寮で冷たくなつていたんです。なのに会社は非を
 認めないのです。おかしいと思いませんか。
 係長 ・・・それは―
 咲子 世界一の車生産を誇るワー・ルドがですよ、実
 態を尋ねたご両親を門前払いしたんです。私も許
 すことができなくて抗議行動に参加しました。
 係長 それがいかん
 咲子 どこがいけないんですか。行ったのはきちん
 と休暇届を出しているし、自分の仕事の手を抜い
 たことはありません
 係長 いや、君の気持ちをはわかる、しかしね、そ
 の、若い人の正義感往々にして思想的な団体に
 悪用される。そこを心配してるんだ。
 咲子 ああ、働くもののいのちと健康を守るセンタ
 ーのことですか
 係長 それそれ
 咲子 あそこは過労死を許さないことと力を注い
 でいて、今回の彼のことに組みんでくれてい
 ます。ああ―
 係長 なに？
 咲子 ご存知ですよね、「過労死防止法」が国会で
 成立したこと
 係長 もちろん
 咲子 国会で成立したことを推進するのが危険な思
 想団体になるんでしょうか
 係長 そうストレートに言ってるんじゃない
 咲子 ・・・
 係長 私の個人的意見として聞いてもらいたいんだ
 が、君が今のまま行動を続けると従業員の立
 場が危なくなる
 咲子 ・・・
 係長 君のような娘（こ）をそういうような辛い立
 場に追い込みたくなかないんだ。

咲子 …… 解雇ということでしょうか
 係長 も、あり得る
 咲子 …… あり得る
 係長 君も古里の彼に誠意を示したんだ。ここまで
 咲子 で身をひいたらどうだ。
 係長 も行くつもりです。
 咲子 労務として、これだけ言ってもかね
 係長 ・・彼の無念を思うと・・行かないこと
 咲子 でお父さんを悲しませることに
 係長 お父さんは・・父は私に「嘘をつく人生を送る
 咲子 父は・・父は私に「嘘をつく人生を送る
 係長 ・・と繰り返す言いつつ育ててくれました。
 咲子 ・・と繰り返す言いつつ育ててくれました。
 咲子 とまでしゃべったか
 咲子 あ、失礼してよろしいでしょうか
 係長 いや、もう少し
 咲子 十五分と言う約束で組立ラインを離れてきま
 係長 したから
 咲子 一人か
 咲子 弟が二人います
 係長 (台帳の記載を見つけて) そうか、高校生に
 咲子 中学生・・再婚もしないで苦労してきたんだろ
 うな。
 咲子 はい・・父のこと、大好きです。
 係長 (うらやましく思い) 君にうるさい事は言わ
 ないのか
 咲子 健康だけは心配して色々言われますがあとは
 割と自由に
 係長 (独り言のように) そうだ、おやじというも
 のは細かいことは言わない方が・・で、毎日
 楽しいといわけだ
 咲子 そうばかりではありません

があ

・・・でも悔いのない青春をおくりたいと思いま
す。(ふと) 生意気ですか、私――

係長 (台帳を閉じて) 戻っていいよ

咲子 はい。(立上り) あの、この部屋空気が良くな
いようです。

係長 (見廻して) タバコか、全く全室禁煙なのに
咲子 その、シクラメンの花、時々水をやって日向
に出した方が、色も変わらなくていいと思います
係長 そう。

咲子 ふふ・・・その花、ぶたのまんじゅうって呼
び方もあるんです。

係長 詳しいんだね

咲子 私の名前、花が咲くの咲子ですから。

係長 ほっ。(思わず笑う)

咲子 失礼します

――咲子は礼をして去る

間――

係長はシクラメンの花にコップの水をやり、
窓を開ける

係長 (窓からしばらく彼方を見上げてつぶやく)

・・・青春、か。戦後に、そういう夢を見たっ
け・・・

――ドアが開き課長が入ってくる

課長 (半身で外に向かって) 君、昼休みになった
らワールドからのメッセージをアナウンスするよ
うに。LED、ロケット、国産旅客機第一号に水
素電池自動車、愛知は世界に誇る物作りの拠点だ
と、繰り返しアッピールするように。いいね。(ド
アを閉めて中に入り、パソコンを操作しつつ、つ
いタバコを出す)

係長 少し空気が――

課長 うっ。(タバコをポケットへ収め) どうだった

係長 一応話しました

課長 そりゃわかってる、でっ?

係長 ええ

課長 (パソコンをチェックして) 何だ、記録もと

係長 はないのか

係長 はあ、面接に重点を――

課長 本人は認めたのか

係長 まあ

課長 まあ、ではわからん。アカか白か・・・

係長 ・・・・

課長 どうなんだ

係長 全ては同郷の友人を思うやさしい心からの行

動なので、今のところ白、かと

課長 何をつまらんことを言ってる、会社に服従か

たてつくか二つに一つだ。

係長 お言葉ですが、そういう風に追い込んでいき

ますと、かえって反感を招くのではないかと。

課長 すでに反感をもってるから社外で危険な行動

をとっているのだろう

係長 危険と言うほどでは――

課長 もういい、わかった。窓を閉めたまえ

――係長は窓を閉める

課長は電話をかける

課長 組合、労務だが委員長を――(受話器を押さえ

て係長に) きみが 労務にいることは完全にミス

人事だよ。(電話に) あっ、度々どうも。先程少し

話した厄介な女工、それがどうもしぶとくてマル

共くさいですな

係長 (慌てて) いえ、そんなことはありません、

そんな風な子では――

課長 (無視して) 組合の方でも調査入れてもらえ

ますか、第二製造部の伊藤咲子、よろしくお願い

します。・・・えっ? そうそう秘密保護法が強い味

方ですよ。(切る)

係長 ・・・・

課長 早く第二の人生を探すんだな (去る)

――間

係長は窓をそっと開けて、シクラメンに花を眺める。

係長
・ ・ ・ ぶたまんじゅう、か

― 昼休みを告げるチャイム
― ワールドからのメッセ―ジ―が流れる
食堂へ向かうのか、労働者の話声がにぎやか
かに通り過ぎる。

― 完 ―